

## 第1回認定試験解答及び解説

問01 1、

- 1.Canine 犬
- 2.Feline 猫
- 3.Bovine 牛
- 4.Equine 馬
- 5.Swine 豚

問02 5、

ワクチンはどのワクチンをどの動物に誰がいつ接種したかを証明することが必要であり、証明書には、ワクチンを接種した動物の個体識別、接種したワクチンの種類、接種日、接種獣医師情報を記載する。そのため、所有者住所・氏名、動物の種類・名前・年齢・性別、動物病院住所・病院名・獣医師名を必ず正しく記載する。ワクチン接種間隔は、動物病院によって推奨する間隔に違いがあるので、必要であれば記載する。

問03 2、

電話対応においては、相手先への配慮が必要であり、取り次ぎのときには相手先に「少々お待ちください。」と伝えて、電話を保留にして、用件を取り次ぎ相手に伝え、対応の指示を求め、保留時間をできる限り短時間にする。事前に対応方法を決めておくことスムーズな電話対応ができる。また、診察中の獣医師に取り次ぐときには、飼育者に配慮して用件をメモに記入して取り次ぐ。

問04 2、

仕事上の内と外を認識して、外の人に内の人のことを話すときの呼び方は、尊敬語を使わずに謙譲表現を使う。つまり、院長先生ではなく院長の〇〇という。

問05 1、

電話への応答は、できれば3コール以内、「もしもし」は使わないで、病院名・応答者名を伝える。直ぐに応答できなかったときは、「お待たせしました。」を追加する。

問06 2、

診療において処置等をスムーズに安全に行うためには動物の保定は必要である。処置内容に応じて、必要があればエリザベスカラー・バスタオル等を利用して保定する。動物・飼育者・獣医師・保定者等の安全を確保することも重要であり、攻撃的な動物の場合は、鎮静剤等の薬剤を使用することもある。

問07 5、

動物診療助手が受付業務を行うときは、飼育者に最初に接するので、飼育者に好感・安心・信頼を与えるように努力し、自己管理・身だしなみ・礼儀・言葉づかい等にも注意して、向上心を持ってプロとしての自覚が必要である。不得意な業務を克服するための努力も必要である。

問 08 2、

初めて来院する飼育者には、好感・安心・信頼を与えるような接遇は重要であり、飼育者に先入観を持たず不信感・不安感・不快感を与えない態度、清潔感を与える身だしなみ、プラスの先入観を持ってもらう笑顔での挨拶等を心掛ける。

問 09 3、

受付業務では、来院した飼育者から来院理由を聞き取り、動物の状況を確認して、緊急性の有無を判断して危険な状態であれば順序に関係なく獣医師に伝え、必要な書類等の記入を依頼し、カルテを作成して、待合室の状況観察に努める。

問 10 5、

虚脱・意識消失・痙攣・ショック状態では緊急の対応が必要と判断される。

問 11 2、

- 1.後肢内側の大腿静脈からの採血
- 2.前肢の橈側皮静脈からの採血
- 3.頸静脈からの採血
- 4.頸部皮下注射のための保定
- 5.後肢の外側伏在静脈(サフェナ静脈)からの採血

問 12 4、

自然環境保全法は、自然環境を保全することが生物の多様性の確保その他の自然環境の適切な保全を推進することにより、国民が自然環境の恵沢を享受するとともに、国民の健康で文化的な生活の確保に寄与することを目的としている。

鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律は、鳥獣の保護と狩猟の適正化によって生物多様性を確保、生活環境の保全及び農林水産業の発展を通じて、自然環境の恩恵を受ける国民生活の確保と地域社会の発展を目的にしている。

社会福祉法は、社会福祉の推進を目的にしている。

動物の愛護及び管理に関する法律は、動物虐待等の禁止により「生命尊重、友愛及び平和の情操の涵養に資する」とともに動物の管理指針を定めて「動物による人の生命、身体及び財産に対する侵害を防止する」ことを目的にしている。

絶滅のおそれのある動植物の種の保存に関する法律は、絶滅のおそれがある野生動植物の種の保存を図ることを目的にしている。

問 13 4、

特定外来生物とは、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」によって指定された外来生物のことで、すべての外来生物が特定外来生物に指定されている訳ではない。特定外来生物に指定されると、飼養・栽培・保管・運搬・放出・輸入等が規制される。問題の 5 種はすべて外来生物であるがハクビシンは重点対策外来種で特定外来生物に指定されていない。

問 14 5、

犬への予防注射接種を法律によって義務付けている感染症は、狂犬病予防法によって生後 91 日以上の犬に 1 年に 1 回の狂犬病予防注射の接種を義務付けている。

問 15 1、

ワクチンによって予防できる犬の感染症は、犬ジステンパー症(CDV)、犬パラインフルエンザ(CPiV)、犬パルボウイルス感染症(CPV)、犬伝染性肝炎(CA1V)、犬伝染性喉頭気管炎(CA2V)、犬コロナウイルス感染症(CCV)、レプトスピラ症(L)、狂犬病(RV)等である。現在、日本国内で販売されている犬用混合ワクチンは、5 種(CDV・CA1V・CA2V・CPV・CPiV)、7 種(CDV・CA1V・CA2V・CPV・CPiV・L)、8 種(CDV・CA1V・CA2V・CPV・CPiV・CCV・L)等があり、狂犬病は単味ワクチンとなる。

問 16 2、

- 1.チンチラゴールデン
- 2.スコティッシュフォールド
- 3.ソマリ
- 4.マンチカン
- 5.ラグドール

問 17 5、

犬糸状虫に感染した犬の血液中出现するミクロフィラリアを蚊が吸血することにより体内に取り込み、蚊の体内でミクロフィラリアは脱皮して感染仔虫に成長し、蚊の吸血時に犬に感染する。

問 18 1、

体内に SFTS ウイルスを持ったマダニの吸血により感染する。

問 19 3、

犬の平均的妊娠期間は 58～63 日である。

問 20 5、

顕微鏡は、電源スイッチを ON にして光源からの光を当てて、対物レンズから接眼レンズに光を伝えて両眼で観察する。

問 21 4、

眼球の構造は、黒目の部分の角膜から内側にレンズに相当する水晶体、その奥の硝子体、白目の部分の結膜となっている。

問 22 1、

多くの動物は交尾刺激がなくても排卵がおこる自然排卵動物であるが、猫・ウサギ・ミンク等は交尾刺激によって排卵がおこる交尾排卵動物である。猫は交尾刺激から 24～30 時間後、ウサギは 9～13 時間後に排卵される。

問 23 4、

人獣共通感染症とは、人と動物が感染する感染症であり、動物由来感染症、人と動物の共通感染症ともいう。ウイルス性として狂犬病・重症熱性血小板減少症候群(SFTS)・高病原性鳥

インフルエンザ・SARS 等、真菌性としてクリプトコッカス症・皮膚糸状菌症、リケッチア性として Q 熱等、クラミジア性としてオウム病、細菌性としてレプトスピラ症・パスツレラ症・猫ひっかき病(バルトネラ症)・ブルセラ症・炭疽・結核等、原虫性としてトキソプラズマ症等、寄生虫性としてエキノコックス(多包条虫)症、回虫幼虫移行症、疥癬症等が人獣共通感染症に指定されている。

問 24 2、

回虫の人への感染は、直接・間接的な経口感染である。

エキノコックス(多包条虫)の最終的な宿主はキタキツネであるが、犬も終宿主となる。

猫ひっかき病はバルトネラという細菌の感染により発症する。猫から猫への感染の多くはノミの媒介による。

レプトスピラ症は細菌であるスピロヘータが感染したネズミの尿中に出現し、人への感染の多くは手足の傷からの経皮感染である。

問 25 5、

ワクチンによって予防できる猫の感染症は、猫汎白血球減少症(FPL)、猫ウイルス性鼻気管炎(FVR)、猫カリシウイルス感染症(FCV)、猫白血病ウイルス感染症(FeLV)、猫免疫不全ウイルス感染症(FIV)等で、現在、日本国内で販売されている混合ワクチンは、3 種(FPL・FVR・FCV)、4 種(FPL・FVR・FCV・FeLV)、5 種(FPL・FVR・FCV・FeLV・クラミジア)等があり、FIV は単味ワクチンとなる。

問 26 2、

注射針の太さは G(ゲージ)で表示され、数字が大きいほど注射針は細くなる。

問 27 4、

手術野は、毛刈してから消毒を行い、ドレープで術野を覆う。

問 28 1、

犬猫の体温は、肛門より体温計を挿入して直腸温を測定する。

問 29 5、

血液が凝固するのを防止する薬剤を抗凝固剤という。抗凝固剤には、ヘパリン・EDTA・クエン酸ナトリウムがあり、血球数の測定や血球形態の観察を行うためには、血球の形態変化が少ない EDTA を用いる。

問 30 4、

- 1.注射針
- 2.インジェクションプラグ
- 3.三方活栓
- 4.翼付静脈針
- 5.留置針

問 31 3、

- 1.アリス鉗子

- 2.止血鉗子
- 3.タオル鉗子
- 4.骨保持鉗子
- 5.腸鉗子

問 32 3、

動物病院から排出される廃棄物は、事業用廃棄物と医療廃棄物に分別され、さらに、医療廃棄物は感染性医療廃棄物と非感染性医療廃棄物に分別される。感染性医療廃棄物は、血液が付着した物、注射針・メス刃等の先端が鋭利な物等、感染の危険性がある物を専用の容器に入れて管理し、専門の廃棄物処理業者に処理を依頼する。

問 33 3、

一般身体検査として、体温 T・心拍数 P・呼吸数 R を測定する。

問 34 3、

健康な犬の安静時体温は、38.5°C前後で運動・興奮時に上昇し、生理的には 37.5°C以下には低下しない。

問 35 3、

レントゲン撮影は、放射線である X 線を発生させて撮影を行うため、放射線被曝の防護が必要である。無麻酔によって動物を保定してレントゲン撮影を行うことが多いので、防護手袋・防護着等を着用し、フィルムバッチ等で被曝線量を測定して累積被曝量を記録・管理する。被曝線量が増加すると放射線障害が発生する可能性があるため、被曝線量の管理は重要である。被曝線量の基準は、女性がより低い線量に設定されているが、法的に禁止はされていない。撮影されたフィルムを管理するためにフィルムにラベルをする必要がある。

問 36 3、

輸液を行うためには、輸液チューブ・延長チューブ・翼付静脈針か留置針・消毒のためのアルコール綿花・輸液パックが必要である。

問 37 5、

血液は、細胞成分として赤血球・白血球(好中球・好酸球・好塩基球・リンパ球・単球)・血小板、液体成分として血漿で構成されている。白血球の中では、貪食作用等を行う好中球が最も多く存在する。

問 38 3、

両端に栓があり、レモンあるいはラグビーボール状の形態であるので鞭虫卵である。

問 39 4、

泌尿器は、尿を作り・貯めて・排出する器官である。腎臓は尿を作り、尿管によって尿を膀胱に運び、膀胱に貯めて、尿道から排出する。

問 40 4、

薬剤投与経路は、筋肉内投与：IM、静脈内投与：IV、皮下投与：SC、腹腔内投与：IP、経口投与：PO である。

問 41 4、

犬糸状虫は、蚊の吸血によって感染仔虫が感染し、感染仔虫は犬の体内を脱皮しながら移行して成長する。肺組織内から肺動脈内部に移行して右心房・右心室で成虫になり寄生する。

問 42 5、

人獣共通感染症ではない猫の感染症は猫免疫不全ウイルス(FIV)感染症である。

問 43 5、

毛包虫、穿孔疥癬虫は皮膚内部に寄生、耳疥癬虫は外耳道に寄生、ツメダニは毛や皮膚表面に寄生、マダニは皮膚表面に寄生して吸血する。

問 44 2、

コクシジウムはオーシストの経口感染、犬回虫は成熟虫卵の経口感染・胎児の胎盤感染・新生児の乳汁感染、犬鉤虫は仔虫の経皮感染、 Manson 裂頭条虫は第二中間宿主であるカエル・ヘビ・ネズミ等の捕食による経口感染、瓜実条虫は中間宿主であるノミによる経口感染である。

問 45 5、

入院動物であっても獣医師以外の判断で投薬することはできない。

使用期限を過ぎた薬剤は廃棄しなければならない。

診察時間に関係なく飼育者への説明は十分に行わなければならない。

生後 91 日以上の子犬は 1 年に 1 回の狂犬病予防注射を接種する義務があり、室内飼育であっても接種義務がある。

飼育者及び飼育動物に関する情報は個人情報であり、公開することは個人情報保護の観点から認められない。また、動物病院スタッフには守秘義務があり、業務上知り得た情報を公開することはできない。

問 46 2、

動物の種類によって食性の違いがあるので、食性に合わせて食餌を与える必要がある。犬は雑食性に近い肉食であり、猫は犬よりも肉食性が強い。ただし、犬猫の肉食は、筋肉の部分のみではないので、肉食だからといって、ササミのみという食餌は不適切である。ペットフードの品質が向上しているので、総合栄養食のペットフードを給餌することが適切である。ペットフードを使わないで食餌を自作するためには、様々な食材を使い、調理方法も工夫し、栄養学の知識も必要である。

ウサギ・モルモットは草食であるので、本来の主食は野草である。十分な野草を年間を通して与えることは難しいので、乾草の牧草を主食とするのが望ましい。野菜は、栄養価が低いので、間食と考えるべきである。配合飼料は、副食として給餌量を調整する。

問 47 1、

ワクチン接種による最も重要な副反応は、数時間以内に起こるアナフィラキシー反応であるので、接種後数時間は特に注意して観察する。ワクチン接種後は、動物の体内で免疫応答による抗体産生が起こるので、十分な抗体が産生されるように普段と同じ生活をさせて、シ

ヤンプー等によって動物が疲労することは避ける。犬であっても猫であってもワクチン接種後のアレルギー反応は発生する可能性はあり、過去にワクチン接種後の副反応が発生しなかった場合でも、副反応の発生は予測できない。過去の接種によって重篤な副反応が発生した動物では、より重篤な副反応が発生する可能性があるため、接種自体を回避する等の対応が必要である。

問 48 3、

歯石の付着を遅くするためのデンタルケアは、家庭において毎日の習慣としてスキミングのように実施することが望ましい。

既に歯周病等により、口腔周囲に疼痛がある場合には、無理にデンタルケアを行うと口腔周囲を触らせなくなるので、歯周病等の処置を実施して疼痛がなくなってからデンタルケアを実施する。

デンタルケアは、乳歯の時から慣れさせて毎日の習慣にするのが望ましいが、いつからでも家庭で飼育者が実施することが重要である。

問 49 4、

不妊手術は、全身麻酔で行われるので、嘔吐をすると吐物によって誤嚥・気管閉塞を起こす可能性があるため、手術前の絶食は必須である。

問 50 3、

中毒等を起こす可能性があるため、犬猫に与えてはいけない食物等は、タマネギ・ネギ類、チョコレート、ブドウ・レーズン、キシリトール、鶏の骨等、注意して与える必要がある食物等は、レバー、ハウレンソウ、コーヒー・緑茶・紅茶等、生肉・生卵等である。